

# 蘇芳集

由比ヶ浜

高橋 さえ子

大仏の背を打ちたる一葉かな

湘南の入り日ふくふく魂まつり

枯れ兆す野のいろとして由比ヶ浜

隠沼のさざなみあかり葦の花

伊豆石にそれぞれの声末枯るる

空港の灯がちかちかと露けしや

ガラス器の水滴のいろマスカット



花野なら

青山

文

葛の花果てて暫く家にゐる

こんな日もある一本の曼珠沙華

秋の茄子にも花付けて茄子畑

ただ赤いだけで九月の百日紅

焼魚つつついてゐる敬老日

衣被ならいつまでも剥けるかな

花野なら先生はまだをられるか(悼 峠先生 九月十五日)

木の実金色に 野路 斉子

文鳥も小さな頭もて秋思

地虫鳴誰にも聞こえあるつもり

立入禁止なので素通りすすき原

待たねど降る待てど降らざる銀杏は

鳥獣の眠りに木の実落ちる音

音もなく秋の深さの師の母校

木の実金色にわれ等は眸門

濡縁 前田陶代子

藪蘭の淡き一むら九月来る

諸草の二百十日のもつれとも

路地から路地抜けては雨の鶏頭花

鶏頭のしん底濡れてみて赫し

子規庵の低き濡縁 秋兆す

秋深みつつ雨濡れの草のいろ

台風一過煎じ茶のほの苦し

田 幸敏

秋 螢

吉田 幸敏

スプーンに貌がさかしま終戦日

戦争を語らず老いぬ秋螢

靴音は通奏低音終戦日

こうやつて秋の来るなり百花園

水の湧くあたりや秋のあめんぼう

ふと消えし背の足音乱れ萩

ともかくも萩のトンネル抜けてみる



水の香 清水裕子

水の香の立つより秋のはじまりぬ  
直ぐなる樹まがりたる樹も秋日濃し  
懸命に歩むよ今日の花カンナ  
湧水のしづかなりけり秋彼岸  
庭石の面のとつとつ九月逝く  
己が影たよりに月の道歩く  
我儘をとほして夏も果てにけり

秋の百日紅 富田正吉

秋すでに胸もとにあり風にあり  
いちにちの真ん中秋の百日紅  
新涼の大きな鳥を見てゐたり  
飯白く炊けて八月十五日  
秋暑し妻に歩けと言はれても  
父の忌につづく母の忌衣被  
喪服着て見てゐる秋の百日紅

鉦叩 小川美知子

秋天へ私は此処と言つてみる  
さやけて水辺は水を忘れけり  
風も日も門も礎石もつくつくし  
その後はみんなで歩く萩の花  
もの影の濃くなつてゆく秋の蝶  
誰か来て欲しくて虫時雨のなか  
鉦叩二度聞き分けて眠りけり

色なき風に 木内憲子

秋めくと音せぬやうに階を踏む  
洗足や色なき風に鳥が翔ち  
かたまつて鯉の肥れる野分あと  
爽やかに三々五々といふかたち  
をみながら渡る木の橋木染月  
九月くる池一枚を靸しつつ  
高西風も勝海舟の墓前なる

